




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 3006 号	氏名	石橋 弘基
審査担当者	主査	赤木 純	
	副主査	赤木 由人	
	副主査	光岡 正浩	
主論文題目： Four-year outcomes of intravitreal aflibercept treatment for neovascular age-related macular degeneration using a treat-and-extend regimen in Japanese patients. (日本人の滲出型加齢黄斑変性に対するアフリベルセプト硝子体内投与 treat-and-extend 法の4年成績)			

審査結果の要旨（意見）

本論文は、滲出型加齢黄斑変性に対する標準治療である抗血管内皮増殖因子（vascular endothelial growth factor : VEGF）薬硝子体内投与の投与方法に関する論文で、投与間隔を延長しながら計画的に投与する Treat and Extend (TAE) 法の有用性が詳細に検討されている。抗 VEGF 薬であるアフリベルセプト硝子体内投与を TAE 法で施行した 39 例 39 眼の 4 年成績を検討され、治療開始後から 4 年後も平均視力の維持、中心窩網膜厚の改善・維持が可能で、注射回数を最低限に保ちながら、投与間隔の維持も可能であった。これらの結果は、滲出型加齢黄斑変性の患者の治療成績のみならず、QOL の維持、さらに医療費の軽減にも貢献しうる結果と思われる。以上より、本論文は学位論文として相応しいと判断される。

論文要旨

滲出型加齢黄斑変性は加齢に伴い脈絡膜新生血管が発症する網膜黄斑部の変性疾患で、現在、抗血管内皮増殖因子（vascular endothelial growth factor : VEGF）薬硝子体内投与が標準治療として用いられている。治療初期の目標は視力改善で、その後は改善した視力を長期に維持することが目標となる。抗 VEGF 薬の維持期の投与方法として、投与間隔を延長しながら計画的に投与する Treat and Extend (TAE) 法がある。今回、抗 VEGF 薬であるアフリベルセプト硝子体内投与を TAE 法で施行した 39 例 39 眼の 4 年成績を検討した。平均視力 (ETDRS letter scores) は治療前 63.9 文字から治療後 1、4 年で 70.4 文字、67.3 文字と 1 年で有意に改善し 4 年後も維持可能であった。中心窩網膜厚は治療前 380 μ m から治療後 1、4 年で 229 μ m、210 μ m と 1 年で有意に改善し 4 年後も維持可能であった。注射回数は 1、2、3、4 年で 7.9 回、6.0 回、5.5 回、5.4 回であった。投与間隔を 12 週以上に延長できた割合は 1、2、3、4 年で 46.2%、46.2%、43.6%、46.2%であった。治療後 4 年では 30.8%が 7 週間隔以下での投与を要したが、26.5%で 16 週間隔以上に投与間隔を延長できた。アフリベルセプト硝子体内投与 TAE 法は治療後 4 年の長期でも治療前と比較して視力、中心窩網膜厚を有意に改善・維持することが可能であった。患者毎の病勢に応じて投与間隔を設定することで overtreatment や undertreatment をさげ、適切に治療することができる有効な治療法と考えられた。